

# SEKISUI INTERIOR PRESS



次世代へ残す  
「これからの家」を考える

sustainable energy

料理研究家、岡本啓子さんの

## 「美しく快適な」持続可能な暮らし

「持続可能な暮らし」というとき、あなたはどんなことを思い浮かべるでしょうか？  
エネルギーを節約するために、多少の不便さ、冬の寒さや夏の暑さを我慢することでしょうか？  
でも我慢をしなければならないのでは、やっぱり長続きしません。  
大切なことは、エネルギーだけでなく、暮らしも快適さも「持続可能」であることです。  
料理研究家の岡本啓子さんの自宅は、自然エネルギーを生かした住まいです。  
インテリアにも気を配り、試行錯誤を経るうちに、  
目指すべき快適な暮らしとはどんなものかが見えてきました。

料理研究家の岡本啓子さんが、愛知県知立市に自宅を新築したのは19年前のことでした。ご主人の康男さんが太陽エネルギー利用の研究者ということもあり、新築の家は太陽熱を使って、給湯や冬の暖房などをまかなう工夫を凝らした実験的な家になっています。家は敷地の南側に、広い壁を見せて建てています。たいていの家が南側に大きな窓を設け、室内に太陽の光を採り入れようとするはずなのですが……。「家の南面は、コンクリートの分厚い壁になっています。低い角度で差し込む冬の日差しは、昼の間この壁を暖め、夜になると室内側にじわじわと放熱されて、家の中を朝まで暖めてくれるんですよ」と岡本さん。逆に、夏は暑さを遮ることができるように、この壁をシャッターで覆ってしまいます。

リビングルームは気持ちのよい吹き抜けに、1階は蓄熱壁で塞がれているので、採光は

壁の上、2階の窓から。それでも十分な光が差し込みます。鉢植えの植物も、のびのびと枝を広げていました。

面積が多くて目立つ壁は、2年前の改装で、白い壁から、ボンベイの遺跡をイメージした赤い色に塗り変えました。全体を均一の色にするのではなく、刷毛の跡も生かし、右から左、下から上へとグラデーションを持たせ、まるで1枚の大きな絵のような効果です。

インテリアを大切に考える人にとっては、照明もまた重要な要素です。岡本さんの家では改装を期に、ダウンライトからテーブルランプに至るまで、すべてを温かな色に見える蛍光灯に換えました。より消費電力が少なく、耐久性も望めます。

自然のエネルギーを生かすだけでなく、できるだけ無駄なエネルギー消費をなくし、それでいて、インテリアもあきらめない、そんな工夫が至るところに見られます。

吹き抜けになったリビング。大きな壁は、刷毛目も生かしながらグラデーションに塗って、壁そのものが1枚の絵のような存在感に仕上がっている。照明はすべて、演色性のある蛍光灯で、鬱陶気を損ねない。

keiko  
okamoto



リビングへの採光は、蓄熱壁の上の2階の窓から。冬も夏も、室内は一定の心地よさがあるので、植物が生き生きと育っている。



シャッターの奥に、コンクリートの蓄熱壁がある。冬の間はシャッターを全開にして、太陽熱をいっぱいに取り込む。

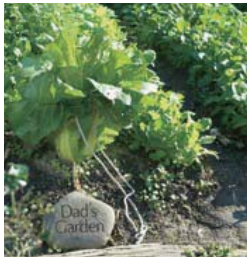


名古屋市内で、フランス料理教室「ラ・ココット」を主宰する岡本啓子さん。庭で育てたハーブを使った料理が食卓に並び、著書に「ハーブと野菜がおいしい 毎日のごちそう」(講談社)など。ヨーロッパ文化に造詣が深い。最近では、日本文化を守ることの大切さを感じ、本物を極めたいとの思いが強まっているとか。

1階手前はダイニングの窓。夏になると、パーゴラに藤や葡萄が蔓をからませ、太陽の熱を遮る。植物が葉を落とす冬は、ダイニングの奥まで光が差し込み、室内を暖めてくれる。



## 太陽の恵みをできる限り生かしたい



夫妻でハーブや野菜を丹精している庭。雑草や落ち葉、生ゴミなどを堆肥にしている。この家に引っ越してから、生ゴミは一度も収集に出したことがない。収穫はなかなかで、毎日食べても追いつかないほど。

庭で採れたハーブや野菜をふんだんに使った岡本さんの料理。



ダイニングルームの床には黒い玄武石を貼っている。冬の低い太陽が差し込み、床をぽかぽかと暖めてくれる。

住まいに活用できる自然エネルギーとして、太陽の熱は比較的に早くから研究されてきました。岡本さんの家も、太陽の光を最大限に浴びようと、南に向かって横に長く広がっています。近くに遮るものがない恵まれた敷地ということもあり、家全体で太陽の恵みを受け取れるようになっています。

屋根に設置されているのは太陽熱コレクターで、ここで暖まった不凍液で床全体を暖めたり、お湯をつくったりしています。

さらに冬の太陽は、南側のリビングの壁を暖め、ダイニングでは大きな窓から室内に差し込み、石の床を暖めます。暖まった壁や床は、部屋をひと晩快適にしてくれます。

庭には太陽を浴びてハーブや野菜が元気に育っています。雑草や落ち葉、生ゴミまでも堆肥にしているので、野菜がよく育ちます。「毎日収穫してもサラダでは食べきれないほど。炒め物や漬け物にしてどっさり食べています」と岡本さん。

気候や敷地条件にもよりますが、ふんだんにある太陽の力をうまく使うことが、省エネルギーの第一歩かもしれません。

2階のゲストルーム。建物全体が暖まると、2階の部屋も、ひと晩快適な状態になる。「朝、寒いと感じることがなくなった」と岡本さん。



## 実用的だけれど、インテリアを犠牲にしない

自然エネルギーを効率よく使うために、今できることを試みた岡本さんの家ですが、決して機能一点張りではありません。庭づくりを楽しみ、インテリアも楽しんでいます。

リビングの絵のような壁はもちろんのこと、夫妻で海外旅行に出るたびに発見するアンティークやその土地の珍しいもの、実家から受け継いだ油絵などが家の中のコーナーを飾り、インテリアに趣を添えてくれます。着るには古くなってしまったきものは、ほどこいて生地とし、ゲストルームの飾り棚のポイントにしています。大切な食器棚の扉は、地震に備えたストッパーを、しゃれた革でつくりました。

家の中が過ごしやすくなると、逆に外に出るのが苦にならなくなったとか。夫妻とも、時間があると庭に出て、野菜やハーブの手入れに余念がありません。

1年中気持ちのよい空間で暮らしを楽しんでこそ、次世代へ送る、持続可能な家だということを、岡本さんの自宅は教えてくれます。

## 快適のカギは「壁の温度」?

さまざまな試行錯誤や実験を経て今のスタイルに落ち着いた岡本さんの家。取材に伺った日は、小春日和の暖かな日でした。日差しに暖められたリビングの壁は、手で触っても感じるか感じないかのほのかな温もりです。また、床暖房の温度も、じんわりと暖かい程度で、「暖房」というほどではありません。それでも岡本さんの家では、冬でも室温21～22℃くらいで快適に過ごせるのか。

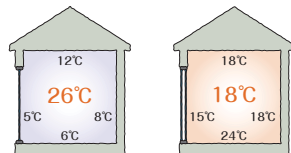
室温はそれほど高くないのに、冬でもセーター1枚で気持ちよく過ごせる秘密は、壁、床など、建物そのものの温度にあります。つまり、建物が温もっていれば、室温がそれほど高なくても人は気持ちよいく感じ、建物が冷えきっていれば、室温を上げないと暖かさを感じないのです。

逆に、夏の間は遮光に気を配ります。岡本さんの家では、リビングの蓄熱壁は、夏の間はシャッターで覆い、ダイニングの窓の外には藤や葡萄が蔓をからませた、緑の日陰で日差しを遮っています。家の南側に落葉樹があれば、夏は茂る葉で太陽を遮り、冬は落葉して家の中に日差しを誘導することもできるわけです。

建物自体の温度を、冬は暖かく、夏はできるだけ涼しく

く保つことができれば、室温のコントロールに多くのエネルギーを使わなくても済みそうです。外気の変化から守れる家であることが、家の中の快適さにつながるのです。岡本さんの家では、6年前に、建物の断熱を万全にしました。新築した当時は、今ほどよい断熱材がなかったのです。このときの改装で外壁をはがしての大工事をし、より断熱効果のある素材に変えることで、断熱水準を思いきり上げたのでした。

「この改装のあと、家の中の空気がまろやかになったと感じました。冬に暖かいとか、夏に涼しいというよりも、家の中に一年中、気持ちのよい季節ができたようです」



壁や床が冷えきっていると、室温を上げないと暖かく感じないが、壁が暖かいと、室温が高なくても心地よく感じる。(岡本康男著「体にはいちばん快適な家づくり」講談社+α文庫)より



部屋のコーナーを飾るのは、アンティークの食器や絵画、外国の街で見つけたものなど。きもの地を、飾り棚の壁に使ったり、食器棚の扉を革のストッパーで止めたりと、楽しいアイデアが生きている。



# Close Up

showroom & shop

## 木を知り尽くしたものにしか創れない 本物と呼ばれる家具づくり いまも進化し続ける、マルニ木工

マルニ木工の魅力は、何といても木を知り尽くした技術と品質です。日本の木工家具の工業化の道を開き、常にインテリアシーンをリードして、創業から80年あまり。その老舗ブランドは、いつまでも変わらないロングセラーの家具をつくり続けながら、時代の先端をゆくデザイナーとのコラボレーションにも積極的に挑戦し、いまも進化を続けています。今回は、そんなマルニ木工を、さまざまな角度からクローズアップしてみたいと思います。



### 「工芸の工業化」をモットーに 日本のインテリアシーンの 近代化に貢献してきた老舗ブランド

1928年の創業以来、高品質な家具の普及に努め続け、昨年80周年を迎えたマルニ木工。創業者である山中武夫氏は、少年時代に過ごした広島県宮島で、まるで手品のように形を変えていく伝統工芸の「木の不思議さ」に魅了され、自分が学ぼうとしていた機械の理論を木素材に生かしてみたいと独学でドイツ語を習得。西欧の技術書を読み漁り、高校を卒業後すぐに「山中研究所」を設立しました。それが「技術のマルニ」と呼ばれる原点です。

その後、マルニ木工の前身である「昭和曲木工場」を設立し、当時としては技術難度の高い「木材の曲げ技術」を確立し、手工業であった日本の家具工業に技術革新を起こすために、「工芸の工業化」をモットーに「職人の手によらない分業による家具の工業生産」にこだわり続けます。

さらに、第二次世界大戦後は、いち早く生産方式の革新に取り組み、ヨーロッパ



のバの新技術を導入。1953年にはデッキチェアを発売し、「ペランダにはマルニのデッキチェア」と言われるほどの大ヒット。コスト競争力を武器に、アメリカへの輸出も始めます。

その勢いに乗って高度成長期の60年代には、現在もロングセラー商品として人気の「ベルサイユ」が誕生。これが日本最高生産台数を記録し、ついに国内家具メーカーのトップブランドに成長。マルニ木工は、その後も時代が求める家具づくりに挑戦し続けてきました。そして昨年には、ロングセラー「ベルサイユシリーズ」と「地中海シリーズ」をリファインした「トラディショナルシリーズ」を発表。今や世界を代表するデザイナー、深澤直人が手掛けており、新たな命が吹き込まれた「ベルサイユ」のバリエーションのような優美な脚が印象的です。



Photo by Yoneo Kawabe



Photo by Yoneo Kawabe

### 世界が賞賛する深澤直人が手掛ける MARUNI COLLECTION 2008

マルニ木工の挑戦は、さらに続きます。80年に亘り培ってきた工芸と工業を融合させた独自の技法を生かしたニューコレクションを深澤直人との共創により実現。「ベルサイユシリーズ」「地中海シリーズ」のリファインも含め「MARUNI COLLECTION 2008」として発表しました。

深澤直人から提案されたのは「讃嘆うどんのようなコシのあるものづくり」。デザイナーの要望を家具職人の立場から押し返してほしいし、納得させてほしい…。そんな想いを受けて共に練り上げた「コシ」が、お互いの予想を超える作品に結実しています。

創業地でもあり、海外に発信することを意識して「HIROSHIMA」と名づけられた、自然な木肌が魅力の新たなシリーズは、熟練の職人による高度な手作業の仕上げが必要のため、アーム



Photo by Yoneo Kawabe

チェアなどは1日に生産できるのはわずか4脚。その繊細な美しさには、木工家具の新たな魅力が見事に表現されています。

また、「HIROSHIMA」と「トラディショナルシリーズ」は、昨年10月に早くも新作が登場しました。同じデザインでありながら素材や塗装を変え、ブラック仕上げにすることで新たな魅力をプラス。使う人のシチュエーションや好みに合わせ、より永く愛されるような定番の家具をめざして発表されたもの。今後の展開にも期待が膨らみます。



Photo by Yoneo Kawabe

## nextmaruni



Photo by Yoneo Kawabe

### 日本の美意識を 世界に発信する ネクストマルニ・プロジェクト

マルニ木工は、産業と文化の融合的な活動にも積極的に取り組み、注目を集めています。そのひとつが「ネクストマルニ」というプロジェクト。日本の美意識へのメッセージとして、建築家の黒川雅之氏を中心とした11人の著名なデザイナーとのコラボレーションにより、12脚の木製小椅子をつくりました。

そのユニークな試みは、12脚目の椅子を国際コンペティションにより決めるというグローバルさにも表れています。

そもそもこのプロジェクトが始まった理由は、日本には家具の歴史らしい歴史がなく、「日本の思想から生まれた世界の椅子」をつくりだしていきたいという熱い想いからスタートしたということ。

ネクストマルニは、その想いを「作品でもあり、商品でもある椅子というかたち」で表現しています。

### ショールームで 触れてみて初めてわかる 技術力と品質の確かさ

マルニ木工には、東京・大阪・広島・福岡の全国4か所にショールームがあります。

思わず触れてしまう感覚、座ってみて感じる満足感…。やはり家具は、自分で触れて感触を確かめていただくのが一番です。

時代を超えて愛され続けているロングセラーから、世界のデザイナーによる作品まで。写真からはわからない真の魅力を感じていただけるものと思います。



Photo by Nizase & Partners Inc.

マルニ木工東京ショールーム  
東京都中央区東日本橋3-6-13 TEL 03-3667-4021

TOPICS  
トピックス

人に環境にやさしいインテリアをめざす「ファインデコ」。セキスイインテリアとして皆様の住まいづくりに役立つ耳寄りな最新情報をセレクトして、いち早くお伝えします。



takashi saito



ユニークな教育スタイル「齋藤メソッド」で知られ、TVや雑誌等でも活躍中の明治大学文学部教授 齋藤孝先生とセキスイインテリアのコラボレーションによって生まれた、子どもをのぼすインテリア「wepi (ウェビ)」。学習用デスクや椅子、本棚や勉強をサポートするダイニングテーブルなど、齋藤孝先生の独自のアイデアを盛り込んで作った、子どもたちのためのオリジナル家具です。そろそろ、ご入園やご入学、新学期に向けて、お子様の学習環境を整えられるご家庭も多いかと思えます。ぜひ一度、ホームページで「wepi」の魅力をご覧ください。



東京セキスイハイム株式会社 千葉支店の分譲住宅「ハーモネータウン グレイスパーク船橋美し学園」にてwepiを展示していますので、ぜひご来場ください!詳しくはホームページをご覧ください。http://www.link41.com



【知 情 意 体】で子どもを育てる



子どもをのぼすインテリア「wepi」で、新学期に向けて、ご準備しませんか。

商品のご購入・お問い合わせにつきましては、ホームページをご覧ください。

<http://www.s-wepi.com>

「wepi」の空間提案が体感できる、川口・鳩ヶ谷展示場がオープン!

子どもをのぼすインテリア「wepi」による空間提案がご覧いただける住宅展示場がオープンしました。二世帯同居と子育てをテーマにした3階建て住宅、セキスイハイム川口・鳩ヶ谷展示場です。ここではオリジナル家具「wepi」はもちろん、親子の対話を深める昭和スタイルの和空間や家族の情報ステーションとなるカフェ空間など、齋藤孝先生によるさまざまな空間提案を実際にご体感いただけます。ぜひ一度、ご家族でお立ち寄りください。



BOOK

読んだ日から坐り方が変わる、齋藤孝先生の『坐る力』

お父さまが家具メーカーを営まれているということもあり、椅子への造詣が深い齋藤孝先生。先生曰く日本人は坐ることについて大変無頓着だとか。この本では、正坐や坐禅、呼吸法など、身体を整えるための東洋の“坐”の文化を現代のイェ式生活へ応用する方法や、坐り方が人間関係にとっていかに大切なのかについてわかりやすく紹介。坐り方を変えるだけで、生きる力がみなぎることが理解できる一冊です。

『坐る力』 齋藤孝 著 文春新書 ¥756(税込)



REPORT

「からだにやさしいインテリアフェア」開催!



質の高い眠りのブランド・ASLEEP、世界中から厳選した家具を揃えるセレクトショップ・吉桂、そしてFINE DECOブランド・セキスイインテリア3社が合同で開催した「からだにやさしいインテリアフェア」(12月6・7日開催)に多数のご来場ありがとうございました。イベントやセミナーも好評いただき、今後もさまざまなフェア企画を展開してまいります。また次回もご期待ください!

セキスイインテリアは、チーム・マイナス6%に参加しています。



みんなで止めよう温暖化

チーム・マイナス6%



新感覚のレールスタイル収納「WALL RAIL」がデビュー!

「WALL RAIL (ウォールレール)」は、収納とディスプレイの魅力を合わせ持つ、新感覚の壁面収納です。アルミ製のメインレールにフックやトレイ・ケース・シェルフなどを自在に組み合わせて、さまざまな用途に対応可能。シンプルなデザインで住空間を美しく機能的に演出します。

WALL RAIL

セキスイインテリア株式会社

お問合せは下記ホームページまで...

<http://finedeco.jp>